

## 幕末明治の写真師列伝 第九十五回 宮下欽 その十七

8月6日、征討軍は若松方面、米沢方面、村上庄内方面の三方面に分れて北進して会津攻撃戦を開始した。松代藩の部隊の大半は若松方面軍に所属して、津川より鞍掛峠（八十里越）を突破して、西会津方面より進撃する。この時、松代藩の一部は村上庄内方面軍にも参加していた。

一方、長岡軍は8月19日、坂下口に全兵集合して、定林寺で藩主に拝謁し、その後、編成替えを行い、改めて7小隊を編成した。山本帯刀（義路（よしみち））指揮の2小隊は会津藩兵と合流して、津川の地を守備、応援し、残りの5小隊は川島億二郎、萩原要人指揮により決義隊、衝鋒隊と共に、坂下口より鶴ヶ城（会津若松城）救援のため塩川に入った。津川は阿賀野川、若松街道（越後街道）沿いの町で、会津若松と新潟の中間辺りになる。この津川から若松街道を東に進み、現在の国道495号線を東に行くと、喜多方に出る。塩川はこの喜多方の南にあたり、鶴ヶ城（会津若松城）の北の守りであった。

幕末の長岡藩では、河井継之助（河合秋義）が、12代藩主・牧野忠訓、前藩主・忠恭から絶大な信頼を得て台頭し、門閥打破を狙った越後長岡藩の慶応改革を断行した。山本帯刀は門閥勢力の代表格だったが、河合とは終始友好的であり改革に協力して自家の知行高を1,300石から400石に減石する事にまで同意している。山本帯刀は戊辰戦争・北越戦争では長岡藩の大隊長として出陣。二度目の長岡城落城後、藩主一家は仙台藩に、長岡藩兵は、仙台藩と米沢藩に逃れたが、山本隊は鞍掛峠（別名八十里峠）で殿を務めた。山本隊の精鋭40数名は米沢に向かわずに、8月末会津藩兵と合流して、奥羽越列藩同盟の盟主・会津若松城主松平家を守るため、会津・飯寺（にいでら）村において遊撃隊として官軍（主力は徳川譜代の宇都宮藩兵）を相手に奮戦した。

ここで、会津戦争についての概略を説明しておく、新政府軍は白河城を攻略し、ここを本営として北上し、一方、海路で平潟に兵を送り、磐城平、相馬を攻め、仙台に兵を送る、合わせて別働隊を棚倉方面にも送り、さらに三春、二本松も攻めるといった戦略であった。

7月29日、三春藩は同盟軍を裏切って背後から仙台藩兵を襲撃、以後、新政府軍の先鋒となり、二本松藩に攻め込んだ。このため二本松城が落ちれば須賀川周辺に駐屯していた仙台藩兵は前後に攻撃を受けることになるため、仙台へ帰れなくなると戦意を喪失し、戦場から離脱し始めた。仙台藩は奥羽越列藩同盟の盟主であるから、本来は二本松藩へ応援に行くべきであったが、逃げ出してしまったのである。これにより二本松藩は孤立無援の戦いとなり、少年兵まで動員して戦ったが、新政府軍の猛攻を受けて、二本松城の城内の守備兵は城に火を放って、ついに落城する。二本松少年隊の戦死という悲劇が起こったのもこの日のことであった。これにより新政府軍は8月上旬には白河から二本松間を完全に手中に収めた。二本松城の落城と仙台藩兵の撤退で、新政府軍の会津侵攻はもう間もなくという状況となった。

奥州街道から会津に侵攻する道は、大平口（羽鳥峠）、勢至堂口（勢至堂峠）、中山口（中山峠）、中地口（三森峠）、御霊櫃口（御霊櫃峠）、石筵口（母成峠）、土湯口（土湯峠）などである。土佐藩参謀板垣退助と薩摩藩参謀伊知地正治とは意見が分かれ、激論となったが、最終的には板垣の正攻法は退けられて、伊知地の石筵口（母

成峠）攻撃案に決まった。会津藩は精強部隊を勢至堂口（勢至堂峠）と御霊櫃口（御霊櫃峠）に配備していたが、二本松城の落城で情勢が変わったことから、主力を中山口（中山峠）に移動させることとなった。新政府軍が二本松から石筵口（母成峠）を攻撃する道は三つあった。一つは二本松から玉ノ井に進み、赤木平を越えて、銚子ヶ滝がある勝岩を登って母成峠に向かうルート。もう一つは玉ノ井から安達太良山に連なる和尚山の南麓を登るルート、三つ目は玉ノ井から舩田峠を越えて石筵村に入り、そこから母成峠に向かうルートである。いずれも難路で案内する者がいなければ相当の困難が予想された。その中でももっとも進みやすいのが三つ目のルートであった。会津藩は敵の宿泊地をなくすため、石筵村の全村を焼き払っていた。これが裏目に出て村人の恨みを買って、会津藩はこの周辺の農民から反感を買っていた。

8月20日、新政府軍は勝岩と石筵の二つのルートから侵攻することにして、さらに陽動部隊を中山口にも送ることにした。会津藩は石筵口（母成峠）守備のため三つの台場を設けていたが、新政府軍の攻撃により次々と攻略されて、敗退、撤退する。8月22日、新政府軍の各隊は母成を越えて、猪苗代町に着陣する。さらに十六橋も確保して、23日には会津若松まで侵攻する。白虎隊の悲劇が起きたのもこの時のことであった。

8月23日早朝、大垣藩、大村藩、佐土原藩の総勢3,000の新政府軍は、鶴ヶ城北の甲賀町口から急襲して、鶴ヶ城の攻撃を開始する。これに対して会津藩も必死の抵抗に出て、土佐藩参謀板垣退助も強襲を諦め、翌24日から鶴ヶ城の包圍作戦に切り替えて、さらに増援を待つことにした。

9月上旬には、新政府軍は会津盆地の諸口のうち、日光口からも侵攻して、さらに芸州藩、越前藩、尾張藩、備前藩、宇都宮藩、館林藩、小倉藩などの藩兵も続々と増援されて、27,000を超す大兵力となっていた。

8月26日、津川に到着した松代藩八番狙撃隊と三番小隊の部隊は、29日朝、津川を出発して、八十里越えの中の鳥井峠を越えて、さらに岩代国耶麻郡に入り、さらに車峠、野尻を越えて、31日夕刻に野沢に到着し、直ちにこの付近を守衛についた。またそれを追いかけるようにして、松代藩七番狙撃隊と六番小隊の2隊は長州藩兵と共に、30日に野尻付近の守衛についた。

9月1日、松代藩七番狙撃隊と六番小隊は小島村、加賀田村付近を偵察の上、敵がいなくても確認して、長州藩兵と共に、小島村、加賀田村に分れて宿営する。

9月2日、阿賀野川対岸の敵掃討のため、松代藩七番狙撃隊と六番小隊の2隊と、松代藩八番狙撃隊と三番小隊の2隊、長州藩兵4隊、御親兵一番中隊、岩国隊は芝崎口に集結する。阿賀野川対岸の平明、小綱木の敵攻撃を開始。松代藩六番狙撃隊と五番小隊の2隊も銚子口付近より長州藩兵と共に阿賀野川を渡り道目村に入る。阿賀野川右岸の新発田藩、安芸藩兵の部隊に松代藩、長州藩、御親兵の各部隊が応援して、この大部隊で柴崎より滑津、樟山、石坂と敵を追って前進する。このため陣ヶ峯、平明にいた会津軍もこの攻撃に抗しきれずに館の原方面に向かって敗走してゆく。

この結果、芝崎口から平明、真ヶ沢、小綱木方面から敗走した会津軍は、伝習隊200名と共に、阿賀野川北岸の木曾に集結して、征討軍の迎撃体制を図ることとなった。（森重和雄）